

国際耕種と私・湖東朗<その1>

国際協力と国際耕種と私

私が国際耕種や国際協力に関わるようになって、早40年近くが経とうとしている。私と国際耕種の関係や関わった業務の変遷を顧みること、この間の国際協力の変化の一端を振り返ることにつながるとも言える。

私が国際協力に関わった最初の仕事は、1985年からのUAEにおける沙漠緑化に関する共同研究プロジェクトだったが、前社長・大沼との出会いはそれ以前のことであった。その当時私は、それまで勤めていた会社を辞めて、静岡大学農学部で乾燥地農業を学んでいた。同大学の松田先生と横田先生は大沼とともに、その後の私の人生を変えた大恩人である。「乾燥地をめざすなら、とっておきの先輩がいるぞ」ということで紹介されたのが大沼だった。ドバイ(UAE)の農業省にいた大沼に導かれるように、私はUAEの沙漠緑化プロジェクトに参加し、右も左もわからないまま、国際協力の世界に身を投じることになった。

乾燥地農業に関わりたかった私にとって、UAEのプロジェクトはまさに「水を得た魚」のようだったが、同時に初めての海外生活で戸惑うことも多かった。今思えばUAEの現場そのものと、一緒に働いた先輩や同僚、C/Pたちが最良の先生であり、現場での一つ一つが貴重な体験だった。その後UAEから帰国後、1989年から約4年間三祐コンサルタンツにお世話になり、バングラデシュ、パキスタン、ジンバブエ等の開発調査のメンバーとして参加し、開発コンサルタントとしてのイロハを学んでいった。そして1992年、三番目の社員として国際耕種に入社した。

1970~90年代のJICAの国際協力では開発調査が盛んに行われており、そこから無償や円借款事業につなげていくという流れが主流だった。国際耕種は「コンサルタント」としてそうした開発調査に従事しながら、長期専門家として社員を派遣するという、言わば「二刀流」の形態で国際協力に関わっていた。

2004年度以降、いわゆるプロジェクト型の技術協力は、JICAが直接マネージする「直営方式」に加え、競争入札を経て民間企業が受注する業務委託方式(通称「民活技プロ」)が導入され、その割合が増加していった。以降、技術協力は民活技プロが主流となり、C/Pとの協働作業を通して人材育成を図ったり、プロジェクト成果を達成していくことになる。これは長期専門家として活動する時に日常的に行っていたことであり、その経験が民活技プロを実施する時にも効果的に生かされたと思う。

私自身も、シリアで節水灌漑という分野で、長期専門家と技プロメンバー両方を体験する機会があった。長期専門家の場合、現地に長期滞在して生活する。その間にC/Pの自宅に招待されたり、仕事以外でもC/Pとのつながりがあり、仕事を通してだけでなく相互理解を深めることができる。一方、技プロでは仕事だけの付き合いになりがちである。私の場合、シリアにおいて同一分野で長期専門家業務と技プロの両方を経験できたことは得難いことだったと思う。長期専門家時代のC/Pとの付き合いや信頼感の醸成が、その後の技プロ活動に大いにプラスになったと感じている。

いったん築かれた「絆」は永続きするもので、その後2019年にレバノンで元C/Pと再会した時は、昨日別れたばかりの友にまた会ったような感じだった。私にとってシリアにおける経験は、最初のUAEでのプロジェクトと並んで最大のメモリアルである。



UAEの沙漠にて(1985年)